

經濟論叢

第148巻 第1・2・3号

固有価値の経済学	池上惇	1
社会統計学の「外敵」と「内敵」(2)	長屋政勝	22
マレーシアの石油権益における連邦と州の対立(2)	中島健二	54
自由貿易体制下の英国糖業(2)	大沼稜	65
世紀転換期英国における地価課税運動(2)	藤原一哉	76
スコットランド坑夫繋縛制変遷概観(1)	加藤一弘	89
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合弁企業の位置づけ(1)	石川康宏	107
オルタナティブ・エコノミーとしての プレビッシュ理論	安原毅	119
「国民経済」の「自立性」に関する一考察	南有哲	137
日本における塩化ビニール産業の 勃興とその影響	岡本利生	155

平成3年7・8・9月

京都大学経済學會

固有価値の経済学

——その生産と実現の条件，および結果に関する研究——

池 上 惇

I 序 利用可能な資源の有限性・代替性の再検討——固有価値論提起の背景にあるもの——

この論文は経済学において固有価値の理論を提起し，固有価値の生産，流通，消費の過程を検討する。本論で詳しく述べるように，固有価値は人類が長い歴史のなかで認識してきた「生産と生活のノーハウ」の複合体であって，一種の知的な資産というべきものである。しかも固有価値は特定の天才の頭脳のなかにあるのではなくて，社会を構成する人々の多様な個性と才能を担い手とし，生産と生活における共通資産（コモン・ストック）として保存され，発展し，継承される。私は，この新学説を従来の経済学の価格や価値の理論に代る基礎概念として確立することを意図した。このような提起を試みる根拠は以下の通りである。

従来の経済学においては，かなり短期の時間を設定し，a) 社会の利用可能な資源の有限性を前提すること，b) 市場における有限な資源の代替性を前提とすること，という二つの仮定を置いた。そして，これらの仮定の下での自由競争下における資源の最適な配分を解明することこそ，経済学の根本問題であると看做してきたのである¹⁾。

しかし最近の情報技術の発展や情報の経済理論の展開は，従来の二大前提に根本から対立するような経済事象や経済理論が存在しうることを示唆してきた。

1) 「経済学は，生産的な財を生産して異なった集団の間に分配するために，代替的な用途のある希少生産資源を，どのように選択するかを決定する学問である。」 P. A. Samuelson and W. D. Nordhaus, *Economics*, 13th Ed., 1989, p. 12.

まず経済事象として注目されるのは、知的な所有権や著作権といった「固有の価値をもつ」アイデア、科学技術情報、芸術文化情報、生活や経営のノーハウなどの知的活動の生産物が従来の消費財や生産財の市場に参入し、大量に取り引きされ流通するようになったことである。

これらの「ノーハウ」は人類の生産した知的な資産の一種である。しかも、かなりの長期間にわたって継承され、蓄積された人類の記憶を基礎としている。K. E. ボールディングは1981年に公開した「社会進化の経済学」において社会の進化過程という長期の時間を設定すると、経済における生産の要素は、従来言われてきたように資本、労働、土地ではなくて、ノーハウ、物資、エネルギーであることを指摘した²⁾。

この知的な資産は情報の一種である。情報の経済学は当初、従来の財を分析したのと同じ方法に従って情報と言う商品の性質を検討したが、検討すればするほど「情報という商品」は他の一般的な財とは違うものだ、ということが分ってきた。とくに問題となったのは、従来の経済学の前提であった資源の有限性や代替性を持たない商品としての情報商品の特殊性である。

例えば、1983年に経済企画庁国民生活局は「情報化社会と国民生活」（大蔵省印刷局）と題する研究を行ない、商品としての情報の特性を次の4点にまとめている。

- 1) 非消費性＝情報の価値（有用性あるいは利用価値）は何回使用しても、一般の財のようになくなってしまうことはない。
- 2) 非移転性＝他人に渡してもノーハウなどが知的なストックとして自分の手元に残る。
- 3) 累積効果性＝有用な情報は累積するほど価値が高まる（マタイ効果）。
- 4) 信用価値性＝財・サービスを購入する場合には通常あらかじめ、その内容を評価することが可能で「情報の完全性」という仮定を置きうるのに対

2) K. E. Boulding, *Evolutionary Economics*, 1981, Chap. 1 (猪木武徳、望月和彦、上山隆大訳「社会進化の経済学」第1章、HJB出版、1987年)。

して、情報の買手は情報の内容そのものが評価の対象であるために事前に評価することは困難であり、情報の所有者の信用が情報の価値を評価する前提であることが多い。情報の不完全性を前提とした取り引きは情報そのものよりも情報の所有者の価値や信用を優先的に評価することを要請する³⁾。

これらの特徴のうち、非消費性、非移転性、累積効果性は資源としての情報が使用によって消費されないこと、その利用価値は所有者が変わるかどうかに関わりなく維持されて、累積されればされるほど利用価値が高まることを示している。消費されず移転されず集れば自ずから効用が高まるのであれば、この資源は所有者にとって無限の利用価値をもつ。ここでは資源の所有者にとって利用価値は有限である、とする従来の経済学的前提は否定されている。

また、信用価値性は、ある情報の利用価値が所有者のもつ社会的な信用に依存することを示している。社会的な信用はその所有者が有用な情報を発信できるとか、コーディネートする力量があることを意味し、何等かの創造能力を備えた人格であることを含意している。このような能力は過去の有用な情報を継承し現実に活かす力量なしには成り立たない。従って、信用価値性のある情報は一般の財とは異なり代替性が極めて乏しいと言わざるを得ない。しかも、信用価値性をやや長期的に評価しようとするれば、情報のなかでも、相当な長期にわたって継承され、消費されても価値を失わず、累積効果をもち、創造者の名と結合された「人間的な信用」によって価値を維持しつづけるものがある。この場合には代替性は、全くない⁴⁾。

本論文では、このように、所有者にとって無限の利用価値を持ち、代替性の

3) 経済企画庁国民生活局「情報化社会と国民生活——技術的側面を中心として——」大蔵省印刷局、1983年、3ページ。

4) これらの特徴は短期的な取り引き関係に限定してみると、たしかに重要な基本的のものとと言えるであろう。しかし同時にやや中長期的にみると情報の有用性は絶えず変化するはずであって蓄積された情報が何時でも、何時までも重要で有用であるとは限るまい。私はかつてこの側面を「情報の利用における価値の変動性」と名付けた（池上「情報化社会の政治経済学」昭和堂、1985年初版、45-46ページ）。情報の利用価値は絶えず変動しながら固有価値を持つ情報が生き残り、人類の世代を越えて継承される。

全くない商品としての情報を、情報一般から区別して「固有価値をもつ情報」と名付ける。このような情報の例としては、通常「古典」や「発明・発見・法則」の名でよばれる科学技術上のノーハウや著作物、絵画・彫刻・陶芸・建築物・音楽・演劇・オペラ・映画・詩・小説などの芸術文化上の創作方法や作品、などを挙げることができよう。これらの固有価値は人間による思想の創造の成果であるという点からいえば個人の個性ともいうべき内発的な独自の精神生産物であるという特徴がある。しかし固有価値をもつ情報は個性と同時に、共通の言語や知識があり、人間的な感性があれば、すべての人間に受容しうる情報であるという普遍性もある。これらの特徴をもつ固有価値は経済活動において益々重要性を高めつつあるので、固有価値を経済学のなかで、どのように位置付けるべきか。資源の無限性と代替性ゼロの経済学とは何か。それは経済発展にとってどのような意味をもっているのか。これは本稿における検討課題の焦点である。

II 固有価値とコモン・ストックの形成

個性的でかつ普遍的な性質をもった「固有価値をもつ情報＝人類の知的な資産としてのノーハウ」は人類の歴史的な生産活動の基本的な要素である。人類は遺伝子を担い手として、これらの「ノーハウ」を記憶として継承し、蓄積し活用する。

人類は、これらの「ノーハウ」を活用して自然からエネルギーを得、また、物質を採取し抽出し、加工する。これを物質的な富の生産という。物質的な富の生産の成果は人類の消費生活のなかに活かされて生命の生産や再生産に貢献する。生産と消費の過程はロビンソンクルーソーの孤立した労働や消費の行なわれる時間や空間のなかで進行するわけではない。むしろ、生産においても消費においても、社会における仕事の間の分業や地域における学校教育に見られるように「ノーハウ」は分業に従事する職業人や教師の活動を媒介として伝達され豊富化され学習される。「ノーハウ」の形をとった固有価値は社会の大多

数の生産者と消費者にとって物質的な富を生産し生命活動を充実させる「かけがえのない」「代替性のない」情報である⁵⁾。

人類が固有価値を、いかにして生産し継承するか、を経済学の対象として最初に取り上げたのは、A. スミスであった。彼は市場経済の基礎である分業と私的な所有が、一方では学者などの職業を生み出して知的な成果をもたらすとともに、他方では、分業によって開発された個々人の才能が商品の交換を通じて人々の生活を支え合う関係を鮮やかに描き出している。

まず分業のなかから人類の知的な資産を継承しうる才能が生れてくるという点について、スミスは言う。

「異なった人々の間の自然的な才能の差異は我々が考えているほど大きなものではない。人が成人に達してから異なった職業の人々に差を与えているかにみえる天分の差異は職業を選ぶに至った原因ではなくて、むしろ、職業についたがために生じた分業の結果なのである。」⁶⁾ 彼はしばしば学者とポーターの分業を例に挙げて学者の才能もまた職業に従事した結果であることを説明した。この説の是非はともかくとして、経済秩序のありかたが、固有価値の発展や継承にとって積極的な意味があることを示唆した点で注目すべき指摘であろう。

さらにスミスは分業と交換の社会が個々人の才能を開発するだけでなく、それらを相互に活かし合う関係をも生み出すことを指摘し、その関係を「コモン・ストック」という適切な用語で表現している⁷⁾。

例えばスミスは言う。「犬のような動物は、たとえ才能があったとしても、それをいわば、共同資産（コモン・ストック）としたり、生産物を交換したりすることはできない。したがって彼らの才能の差異は彼らに取っては何の役に

5) 学習の概念を社会科学の基礎的なカテゴリーとして位置付けたのは、N. Wiener, *The Human Use of Human Beings, Cybernetics and Society*, 1950-1954., Avon Books 1967, N. ウィナー、鎮目恭夫訳「人間機械論」第2版、みすず書房、1979年初版。

6) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776. Edited by E. Cannan 1950, Bd. 1, Chap. 2, A. スミス、大内兵衛、松川七郎訳「諸国民の富」、第1冊、第2章、岩波書店、1959年版。

7) この語を私はかつてインフラストラクチャーとして定義しなおしたことがある。池上「人間発達史観」青木書店、1986年、第II章。

もたない。人類においては全く事情がことなる。すなわち彼らはその幾多の生産物を量または質に応じて交換することができる。』⁸⁾

「財を交換しようとする性向が、さまざまな職業にたずさわる人々のあいだに、顕著な才能の差異をつくりあげるのと同じように、その差異を有用なものにするのも、この性向である。……（犬の場合とは異なり）人間の間では、最も異質な天分こそが、互いに有用なのであって、それぞれの才能のさまざまな生産物は、取り引きし、交易し、交換するという一般的な性向によって、いわば共同資産（コモン・ストック）のなかに持ち込まれるのであるから、あらゆる人は自分が必要とする他の人々の生産物のいかなる部分でも、そこから購入することができるのである。』⁹⁾

ここでスミスは、まず、人間の交換性向が分業と交換のシステムつまり、商業社会（市場経済）を創り出した状況を仮定する。そして、もし、そのとき社会が公正で対等な取り引きを可能にするような制度や前提（成文法などのインフラストラクチャーといってもよい）を整備しておれば、分業によって一人一人の才能の差異を開発するだけでなく、それらの差異を相互に活かし合って享受する社会を創り出すことができると指摘している。彼によれば、このように才能の差異をコモン・ストックとして活かし合えるのは人間社会の特徴であって、犬のような動物種は、マスティフ、グレイハウンド、スパニエルなどに生れながらの天分の差異はあるものの、交換性向がないので差異を相互に活かし合うことはできないのである。当然のことであるが、もし社会に教育制度などが欠けていて、分業が才能の開発ではなくて、作業の単純化によるひとりひとりの判断力の低下を伴うならば、相互に活用されるべき才能の差異は発達しないであろう。

さて、現代社会においては、スミスの時代のように消費者である生産者が生産者である消費者に直接に財を販売するという仮定をおくことは困難である。

8) A. Smith, *Lectures on Jurisprudence*, 1723, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, 1978, p. 493.

9) A. Smith, *An Inquiry*, *op. cit.*, Chap. 2.

例えば、企業者が生産者を組織して製品をつくり市場に出して消費者に販売する、といった形をとる。それゆえに企業がどのような労働の形態を採用し組織するかによって、労働するもののなかでも才能の開発が促進される場合と労働能力そのものが衰退する場合とがありうる。多くの場合、指揮し組織する人々の才能は開発されるが、部分作業をこなすだけの人々は才能を開花させることは難しい。そうすると、完成された財は消費者にとって魅力的なものであっても、企業内における労働のシステムのありかたまで考えないと、市場経済が才能を開発し、それらを相互に活かし合う関係を創り出すとは言いきれないのである。

スミスの時代以降、人類はまず19世紀の中葉以来、工場法を制定し労働時間の短縮や義務教育の普及を図り、20世紀にはテイラーシステムやフォードシステムの経験を経て現代では情報技術の発展を基礎に「労働の人間化」という課題に取り組みつづける。

後述するように、現代の工場がラスキンやモリスの構想した「固有価値を生産する部門」と、「その成果をコピーして量産し財の特性を生産する部門」の両者を持つようになり、前者は芸術文化性を備えた職人的な労働によって担われ、後者は情報技術やバイオテクノロジーによって担われた自動化工程をもつことになれば、新しい技術の基礎の上でスミスのいう「才能の差異を社会の共同資産とするシステム」が再生されるであろう。

固有価値はこのようなシステムのなかでこそ普遍性を実証され、社会を構成する各個人の個性を媒介として維持され継承され発展することができるのである。

II 固有価値の生産と増産あるいはコピー

固有価値を単なる情報として抽象的に把握するのではなくて経済のシステムによって担われた分業や個々人の才能との関連で把握するとしよう。その場合には資本主義経済が過去の社会で蓄積された熟練や芸術文化性をもつ労働

を、どのようにして評価しうるのか、という問題が発生する。この点に注目したのは19世紀後半に活躍した芸術文化経済学の創始者 J. ラスキンであった。

ラスキンは19世紀後半当時の機械の導入による生産を、人間的な労働の喪失を特徴とし、人間に対して非教育的で単調、かつ非人道的なものとみなした。そうであるからといって彼は中世のギルドを復興させて機械生産を否定しようとするものではない。機械生産は合理的な範囲に制限しつつ、労働によって人間性が高まり教育的な効果があり生活のなかに芸術文化性を普及させようような製品の供給を求めたのである¹⁰⁾。

したがって機械生産が利潤の追求を中心とする営利事業として営まれるならば、伝統的な手工業の復興は非営利的な協同組合事業や寄付による公益団体の事業として経営されるべきである、と彼は主張する。彼が推進した著名な産業上の改革はマン島における手織紡織業であった。彼は伝統産業の再建のために芸術的な製品を理解し購入しうる顧客層を開発し、協同組合の資金力と組織力を活かして水車と水力を動力源とし、熟練した職人を中心とした伝統産業を再生させた。中世社会への復帰ではなく、市場や企業組織の発展をふまえ、職人による人間的な労働の回復をめざし、芸術文化を生活のなかに取り入れる消費者の登場によって新しい産業のありかたを模索したのである¹¹⁾。

彼の構想においては、産業における機械の活用によって衰退を余儀なくされた伝統的な手工業を再建することは何を意味したのか。それらは、まず第一に、伝統的な産業にある「芸術文化性をもつノーハウ」を保存し、第二に、人間的な労働の回復と芸術文化性のある製品を享受しうる消費者をつくりだすための教育事業として産業を発展させることに強い関心を示していた¹²⁾と言えるであろう。

10) J. Ruskin, *Fors Clavigera*, Vol. 1-12, 1871-1884, 御木本隆三「ラスキンのユートピアーフォルス・クラビゼラならびに彼の理想論の研究」近藤書店, 1972年, 393-394ページ。

11) 同上, 385ページ。

12) 同上, 384ページ。

これらのことは固有価値を生産するシステムをいかにしてつくりだすか、という視点から評価した場合、現代の産業や生産のシステムを構想する上で多くの示唆を与えている。現代においては情報技術の発展などによって、固有価値をコピーしたり増産したりするシステムは急激に発展し、固有価値を創り出し継承する能力をもつことは企業にとって重要な競争力の構成要素となった。多くの企業は科学者、技術者や芸術文化の専門家、デザイナー、建築設計者などを雇用して直接的な製造部門とは区別される研究開発部門を設け始めた。しかし固有価値をもつ伝統産業や熟練、さらには文化財や景観、自然環境の保存や希少資源、「かけがえのない」人材などの確保に企業が関心を持ち始めたのは主として1970年代以降のことである。

個性や多様性を財の性質として理解すれば、現代の経済学が解明すべき対象は、一層拡大していることが確認される。最近、画一的な大量生産システムでは理解し難い問題が多発し、アルヴィン・トフラーの表現をかりると技術と情報のシステムは「従来の大量生産方式からマス生産方式と非マス生産を複雑に折衷した方式」や、あたかも「消費者からの直接管理を受ける」かのような注文生産に類似の方式が普及してきた¹³⁾。このような方式にあっては生産者と消費者の市場における契約を新しい次元で理論化しなければならない。だが従来の経済学は未だにこの点の理論化には成功していない。例えば最近焼酎を製造する企業の一部は伝統的な優れた味や香を保存しさらに現代的に発展させるために熟練した杜子を雇用し熟練を伝達し後継者を教育しつつ伝統的な手づくりによる研究教育部門とその成果をバイオ技術を用いて量産する工場部門をもつものがある。また地域の伝統的な町並みを保存して再生し、再生した家屋のなかに熟練した織り手を配置して伝統産業の製品を供給し、これを販売組織や観光部門、交通通信部門と結合して市場との結合を図る試みも文化開発として知られるようになった。さらに技術が進歩して直接的な製造の過程や事務作業は

13) A. Toffler, *The Third Wave*, 1980, Chap. 15, アルヴィン・トフラー、徳岡孝夫監修訳「第3の波」中央公論社、1982年、第15章。

自動化が進み「作業のプログラムを生産するソフトウェア労働」と「契約の機会をコミュニケーションを通じてつくりだすサービス労働」の比重が高まるとすれば、企業または協同組合が各種の固有価値を維持し生産するシステムを持ち、これらを直接的な製造過程と結合する方式が将来の基本的な産業形態となるであろう。固有価値と固有価値以外の使用価値の関係を解明することは現代の生産を理解する上で決定的に重要な意味をもっている。

さて、固有価値論の発展にたいするラスキンの功績を中間的に概括してみよう。ラスキンの固有価値論は、中世以来のギルドが保存してきた熟練や芸術文化性をもつ労働に向けられた。これらの労働の成果が一般の財の生産に普遍的に入り込むとすれば、固有価値が社会のコモン・ストックを形成する過程は、固有価値を担う一般的な財の性質を問うこととならざるをえない。例えば固有価値をもつ芸術作品をデザイン化した工業製品は「固有価値を担う財」である。現代の経済学においては、ある人間にとっての「いきがい」をもたらすような有用な機能をもつ財の性質を「財の特性」と呼び、財の特性を人間にとっての有用な機能へと転換する過程を研究しようとする¹⁴⁾。「生」と財の役立ちとの関係を重視したラスキンの考察はこれらの方向を先駆的に示唆したものとして高く評価することが出来よう。

IV 固有価値の実現——消費者の享受能力およびインフラストラクチャーとの関係——

資源の有限性と選好や配分における代替性を前提とする経済学においては顕示選好学派の効用理論に見られるように、消費者が市場で財を購入することは同時に財を所有した個人の欲求が充足されたものと看做される。しかし固有価値の無限の利用可能性や代替性のない性質を基礎として経済学を構想しようとするれば、固有価値がいかにして消費の過程で保存され諸個人の才能のなかで継

14) A. Sen, *Commodities and Capabilities*, 1985, Chap. 2, A. セン著、鈴木興太郎訳「福祉の経済学——財と潜在能力」岩波書店、1988年、第2章）。

承されたかを問わざるをえない。

固有価値は財の特性を通じて消費者に受容されてこそ、その有用性が実証される。そうすると消費者の固有価値や財の特性の享受の能力やその発展を経済学の対象とせざるをえないであろう。これは、ことによると経済学の「パラダイム転換」を意味するかもしれないし、従来は経済学説史の陰に隠されていた研究者を歴史の表面に立たせる事になるかもしれない。

19世紀の経済学者で、この点を取り扱ったのはラスキンとモリスであり、マルクスもまた部分的にはこれに言及していた¹⁵⁾。現代の経済学者では A. センが財の特性とその享受能力を問題とする代表的な研究者である。

ラスキンやセンは固有価値や財の特性を担った商品が市場で販売されるとき、購買者がこれらの価値を認識し、かつ享受する能力が発達していなければならないと考える。彼らの考え方に従えば、もし固有価値や財の特性を認識せず享受する能力もないものが、その財を購入したとしても、その個人は自分の欲求を充足することも出来なければ財の特性を機能に変換して自分の生命力の充実や心身の諸機能の発達を図ることも出来ない。固有価値や財の特性は市場でその性質を実現するには購買者または消費者の認識能力や享受能力に支えられなければならないのである。

たとえばラスキンは次のように述べている。

「しかし、これらの物のもつこの（固有）価値が実行あるもの（effectual）となるためには、それを受け取る人の側において一定の状態が必要である。食物・空気あるいは草花が人間に十全の価値のあるものとなりうるに先だって、人間の消化機能、呼吸機能、知覚機能が完全でなければならない。それゆえに実効的価値の生産はつねに二つの要請を含む。まず、固有価値のある

15) 「真実の経済＝節約は労働時間の節約である。……この節約は生産力の発展によって達成される。したがって節約は享受を禁ずることではない。生産のための能力を、したがって享受の能力とともに、その手段を発達させることである」。K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, 1857-1858, Dietz Verlag, 1953. S. 599, K. マルクス, 高木幸二郎訳「経済学批判要綱」Ⅲ, 大月書店, 660ページ。林堅太郎「技術の経済学」島恭彦監修「現代経済学」Ⅰ, 1978年, 33ページ。

ものを生産するということ、つぎにはそれを使用する能力を生産するということがこれである。固有価値と享受（受容）能力があいともなう場合には「実効的」価値、つまり富（wealth）が存在する。固有価値、享受能力のどちらかが欠ける場合には実効的価値は存在せず、すなわち富は存しない。いっぴきの馬もわれわれが乗ることができないならわれわれにとって富ではないし、いっぶくの絵も、これを観賞することができないならばやはり富ではないし、どんな高貴なものも高貴な人間にとってのほかは富ではありえない。」¹⁶⁾

この文章ではラスキンは固有価値とそれを担う財の特性を区別していないが、上の固有価値という表現を「固有価値を担う財の特性」と表現し直したならば、次のセンの指摘と基本的には同じく享受能力を取り扱っていると見てよい。

センは財の特性とその機能への変換を消費者の享受能力と関連づけてつぎのように述べている。

「ゴーマンとランカスターが先鞭をつけたアプローチによれば、財とはそれが備える諸特性の組合せに他ならない。ここで特性とは、問題の財がもつさまざまな望ましい性質を意味している。……たとえば、食物を所有することにより、人は飢えをしのぎ、栄養を摂取し、食べる楽しみを得、社交的な集りを支援するといった、食物がもつ諸特性を入手できるのである。しかし、財の特性はそれを用いて人がなにをなしうるかを教えてはくれない。例えば、あるひとが栄養の摂取を困難にするような寄生虫性の病気をもっていれば、他のひとにとっては充分すぎるほどの食物を消費しえたとしても、彼／彼女は栄養不良に苦しむかもしれないのである。ひとの福祉について判断する際には、彼／彼女が所有する財の特性に分析を限定するわけにはいかない。われわれは、ひとの『機能』（functionings）にまで考察を及ぼさねばならないのである。」¹⁷⁾

16) J. Ruskin, *Munera Pulveris, Six Essays on the Element of Political Economy*, Preface, 1871. C. 14, J. ラスキンの、木村正身訳「ムネラ・プリフエリス」関書院、1968年、14節。

17) A. Sen, *ibid.*

ラスキンの固有価値の概念は、上の文章でみるかぎりセンのいう財の特性にほぼ対応するものと見てよいであろう。両者はともに財の固有価値や特性を所有することと、それらを享受して人間の諸機能を発達させることとを明確に区別している。

この区別を導入すれば人間の享受能力が高まれば財の特性がより充分に活かされるばかりでなく、より高い質をもつ固有価値や特性を求めて生産者の供給能力や生産能力の高度化を促すに違いない。ラスキンは言う。

「したがって、瞬間に、世に存するどのような商品であろうとも、その一定量の実効価値は、これを享受する人類のうちに存している能力の関数である。その固有価値を x で表し享受能力を y であらわすものとすれば、その実効的価値は $x \cdot y$ であり、その量は両係数のどちらかが変動するにつれて変化しどちらか一方の増加によって増加し、どちらか一方の欠如によってゼロとなる。」¹⁸⁾

ここでラスキンがいうところの固有価値を本論文の固有価値の定義にしたがって書き換えてみると次のようになる。

「固有価値をもつノーハウによって自然資源や環境、エネルギーを活かしつつ財の特性を生産するには、固有価値を担う財の特性を享受しうる人間の能力が発達していなければならない。この享受能力の発達によってこそ、固有価値そのものを評価し創造する生産者の能力と固有価値を活かして財の特性を生産する生産者の能力は発達することが出来るのである。」と。

ここに言う「固有価値を活かした財の特性」はセンがいうところの「財の特性」であって、人間の享受能力の発達、財の特性の理解や認識を通じて、その背後にある固有価値を知り、それによって自分の生命力の発達を実現するのである。この意味で言えばラスキンのいう「有効価値」は市場で購買者を見出すばかりでなく、購買者の享受能力によって実現された財の特性、あるいは固有価値を担う財を指すものと見てよい。

18) *Ibid.*

固有価値を担う財が市場で実現され、消費者の享受能力によって有効なものとなった場合、ラスキンは「生（ライフ）」への貢献があったとする。この貢献はラスキンによれば栄養や休養に貢献したというだけではなくて、人間に希望や美や愛を創り出すという。

life とはラスキンによると「われわれは、美しいものを讃えること、希望をもつこと、愛に育まれることによってライフを豊かにしている」¹⁹⁾と指摘されているように、人間の生命の充実を表現する。彼によると人間が自己の欲求を充足しようとするとき、芸術文化を受容しうる力量の有無は決定的に重要な役割を果たす。もし、ある財の特性に担われた固有価値が芸術文化のもつ創造性を受け継いでおり、購入と消費によって希望や美や愛による生命の充実を実現したと仮定しよう。この場合、消費者は、市場経済を通じて「いきがい」を実現したことになる。ここでは効用の増加分と費用の増加分を比較考量する経済人ではなくて、「いきがい」や「自己実現」をもって欲求の充足とする人間が登場する。

現代の経済学ではセンが市場における財の購入によって消費者が直ちに欲求を充足したとみなすのは早計であって、購入後にその財が消費者にとっての「いきがい」を実現しうる機会を持ち得たのかどうか、を考えようとした²⁰⁾。このような考え方に従って考察を進めると、欲求を人間の多様な購買動機や行動の動機と結合して考察し、自由と欲求との関連や欲求の階層制や多様性にも立入って検討せざるを得なくなる。たとえば、自由を求める人間の欲求といっても、それが生存ぎりぎりのところでパンを欲しているときと、恋人とのかけがえのない瞬間を演出するテーブルの上で最高のデザイン、栄養、香、会話に相応しい話題を提供しうるパンを欲しているときとは区別されるであろう。前者はミニマムの欲求を充足する事によって人間に希望を与えるという点で固有

19) J. Ruskin, *Unto This Last, Four Essays on the First Principles of Political Economy*, 1862, Everyman's Library, 1905, 全集版からの訳は五島茂編「ラスキン、モリス」中央公論社、1979年、144ページ。

20) A. Sen, *op. cit.*, Chap. 1.

価値を実現しうるが後者は美や愛をも実現しうるかもしれない。センは自由を区別して、生活や生命におけるミニマム、生存権の確立を求める自由を消極的自由、人間のいきがいや自己実現を求める自由を積極的自由と呼んだ²¹⁾。

ラスキンやセンのように問題を提起すると、固有価値の実現のための社会的な条件は何か、という問題が必ず起ってくる。それは端的に言えば「固有価値の享受能力の発達のための社会的な条件やルールとは何か」という問い掛けであって、現在の資本主義やその基礎となっている市場経済は、どの程度まで、これらの条件を整備したのか、整備できない性質があれば、どのようにして整備すればよいのか、を問う事になる。

ある面から見ると固有価値は「かけがえのない」性質を持っている。この性質は個性とも呼びうるもので、かけがえのない景観やかけがえのない人材などは、その地域の個性や、その人間の個性とも言うことが出来る。他面から見ると、かけがえのない景観は訪れる人々を感動させるという普遍性、あるいは一般性を持っているし、かけがえのない人材は「どこでも、いつでも通用するアイディア」を提供する普遍的な才能をもつ。個性と普遍性は一見すると矛盾しているようでありながら、固有価値の二つの属性である。ここでは生産者としての人間の固有価値生産能力と消費者としての人間の固有価値享受能力の関係を検討したが、この両者の関係を社会的な分業関係のなかで把握しなおしてみよう。ひとりの人間は一面では固有価値の生産能力を持ち、他面では固有価値の享受能力をもつとする。その上で社会を構成する各個人は固有価値をもつ財を生産し市場において、交換してそれぞれの固有価値を享受したとする。例えばAは、かけがえのない味と香と芸術的な形状のパンを財の特性に託して市場に供給し、このパンの固有価値を享受しうるBの需要に応えたとともに、Bが供給した、かけがえのない快適な機能をもつボールペンを財の特性を担い手として購入し、その固有価値を享受したとしよう。この交換はAとBが、どのよ

21) A. Sen, *Individual Freedom as a Social Commitment*, The New York Review, June 14, 1990, p. 49. A. セン, 川本隆史訳, 社会的コミットメントとしての個人の自由, 「みすず」No. 358, 70ページ以下)。

うな社会共通の基盤をもつことによって可能となるのであろうか。誰でも、まず気がつくことは、成文法などのかたちで取引のルールが決っていて詐欺などに脅かされる心配がないことが挙げられる。これらを憲法インフラストラクチャーという。また、情報インフラストラクチャーが整備されて公開された情報に安価に自由にアクセスできて、品質などを適切に認識しうるも必要であろう。また教育や福祉の水準が高くて社会インフラストラクチャーが整備され享受能力に共通の基盤が形成されていることも重要な前提の一つであろう。金融制度、交通・エネルギーなどの経済インフラストラクチャーや土地・環境などの基盤、さらには言語などの共通基盤もおそらくは固有価値の実現の前提として重要な機能を持っていると思われる²²⁾。

V 市場経済における生産者と消費者

現代の経済学は永らく完全競争下の価格と資源配分問題を基礎理論として採用してきたが、完全競争や知識の完全性の仮定については既に以前からF. A. ハイエクやJ. M. ケインズをはじめ多くの研究者から根本的な疑問を提起されてきた²³⁾。とくに前者は完全競争の理論が消費者の欲求の多様性や欲求に応じて生産を行なう生産者の能力の多様性に配慮しておらず、市場の状況の変化に対応した生産者と消費者の認識の発展や適応性を競争過程の本質として位置付けていないことに鋭い批判の目を注いでいる。市場における多様性や個性などの問題を提起すると、製品の画一性や代替性よりも消費者の享受能力に対応した多様な生産物の供給という問題を取り扱うことになるが、多様性、個性と代替性の関連を新しい経済学的な用語によって整合的に説明する理論はハイエクを含めて、いまだに提起されていない。この課題に、本論文は固有価値という用語を用いて決着をつけようとしているのである。

22) 池上「財政学——現代財政システムの総合的解明——」岩波書店、1990年、第1章、54ページ以下。

23) F. A. Hayek, 'The Meaning of Competition', 1946., in F. A. Hayek, Individualism and Economic Order, 1964, J. M. Keynes, The End of Laissez-Faire, 1926.

芸術文化の領域から経済学へ進んだラスキンの学説に象徴されているように、固有価値の理論は、人間の欲求の高度化、生の充実への欲求への着目し、消費者の欲求と芸術文化の関係、とりわけ、消費者の享受能力と享受能力に応えうる生産者の創造能力や労働能力との相互関係を問題とし、理論化を試みている。それゆえに、この理論は生産者の創造能力と消費者の享受能力の相互作用の過程で市場経済や競争過程を把握しようという特徴がある。現代の経済学で、この両者の関係を取り扱っているのは、F. ハイエク、A. センなど少数であるが、固有価値の理論は、これらの提起を全面的に発展させることができる。例えばハイエクは完全競争の仮定や当事者間の情報の完全性にたいして疑問を提起しつつ言う。

「われわれの欲求や知識が絶えず変化する性格のものであるために、あるいは、人間の熟練と能力の無限の多様性のために、同一の均質的な生産物やサービスを提供する多数の人々がいるという想定は無理がある」と。これらの多様性は需要の変化にたいする供給の適応が比較的緩やかな変化の過程とならざるをえず、情報の完全性や完全競争を前提とする取り引きではなくて、競争が不完全であるがゆえにこそ、学習と情報の伝達を通じて、多様な生産能力による供給と多様な欲求による消費とが調整される過程が市場経済の実態であることを示唆している²⁴⁾。

このような視点をさらに発展させてゆけば、欲求の水準を高めて「いきがい」や「自己実現」を財の購入によって充足しようとする消費者は個性や多様性のある財を生産者に求め、生産者はこれに応じて、より質の高い財を供給しようとするであろう。消費者の高い享受能力によって刺激された生産者の生産能力は固有価値の生産や芸術文化の創造能力の発展へと向う。この相互作用は生産者と消費者の間に企業者や資本家が介入する事によって、さまざまな変容を遂げるであろうが、インフラストラクチャーが有効に機能しておれば、両者

24) F. A. Hayek, *op. cit.*, F. A. ハイエク, 田中真晴, 田中秀夫訳「市場・知識・自由——自由主義の経済思想——」ミネルヴァ書房, 1986年, 第3章, 95ページ以下。

の相互作用は機能し続ける。固有価値の非代替性は市場における代替性の要求に対して絶えず調整を余儀なくされるが、ここでは現代における情報技術の発展を踏まえて固有価値の生産の問題を考えると、職人的な芸術文化性のある労働を再生しうる部門とそこで生産された固有価値を量産体制に結合して財の特性を生産する部門という二つの部門をもつ生産のシステムが調整を実行する。

多様な能力をもつ生産者の個性を通じて維持された固有価値は財の特性として市場に現れ、享受能力ある個性的で多様な消費者の増加に支えられて、社会のコモン・ストックを形成し人類の知的な資産として世代を越えて継承されて行く。

最後にラスキンの固有価値論と本論文における固有価値論との異同を示して結論としよう。

ラスキンによれば「固有価値とは任意のものの持つ、生を支える絶対的な力である。一定の品質・重量の一束の小麦は、そのなかに人体の実質を保持するひとつの計量可能な力を持ち、一立方フィートの清浄な空気は、人間の体温を保持する固有の力を、また、ある美しい草花は、五感と心情を鼓舞し活気づける固有の力を持っている。人々が小麦なり空気なり草花なりを拒もうと軽蔑しようと、それはこれらのものの固有価値には少しも影響するものではない。使用されるかどうかにかかわりなく、それら自身の力がそのうちに存在していて、この独自の力は他のどんなもののうちにも存在しない。」²⁵⁾

ラスキンの固有価値の定義は、それが人類にとって「かけがえのない」情報を担ったものであり、人間のライフの発達に貢献するという性質をもつ、とする点で本論文の定義と一致する。しかし上の文章にあるように、自然や財そのものの内に固有価値があるとする主張は、私が本論文で提起した定義（固有価値を人類の知的な資産とみる定義）とは基本的に異なっている。

彼の定義によると固有価値は自然や物質そのものの内在的な性質、あるいは

25) J. Ruskin, *Munera Pulveris*, Chap. 1, C. 13, 地域の固有財や固有性の理論については、宮本憲一「環境経済学」岩波書店、1990年、鶴見和子「内発的発展の理論をめぐって」社会・経済システム学会「社会・経済システム」第10号、1991年10月。

属性である。私の定義では清浄な空気や美しい草花は、それ自体が固有価値を持つのではなくて、知的な資産を継承し固有価値の存在を認識した人間が自然を愛し自然に美しさを見出し自然に希望を見出すが故に、ある個性や地域性をもった空気や草花を固有価値の担い手として位置付け、評価するのである。彼が自然環境に見出して固有価値と呼んだものは、人類がアメニティというものを、知的な資産（美しさ、愛情のこまやかさ、希望を育む情景を含む）の蓄積の結果としてある地域の生活の体験から認識し、その個性ある自然を保全した結果として「固有価値を担うもの」となったのである。小麦についてみると、小麦の原生種を見出す人間の力量は科学者の継承した知的な資産の一つであり、固有価値である。また原生種を保存し改良し栽培するノーハウは固有価値をもつ情報である。しかし農業によって生産された小麦そのものは固有価値を基礎とし、ノーハウを応用し太陽光線などのエネルギーを活用して物質を栽培することによって生産され財としての特性を具えたものである。固有価値の担い手としての自然や、栽培や養殖や増産の成果は固有価値を担う財の特性である。これらは固有価値そのものとは区別される。

もし栽培のノーハウを無視して黴や細菌におかされた小麦は「生」を傷つけて人間の健康を破壊し使用価値であることを止めるであろう。ラスキンのいう固有価値は今日の経済学者の用語に従えば財の特性と呼ばれるべきものであって、その含意は「固有価値を用いて物質を加工し、量産化によって継承された固有価値の担い手」である。

固有価値は、人間の個性や地域社会の個性によって規定され、しかも普遍性を持っている。しかも、それは「生」を支える根源的な性質をもち、財や自然を担い手として人間の諸機能に働きかけて、発達を促す。

ラスキンは固有価値の重要性を認識した先駆者であるが固有価値と財の特性の関係については必ずしも明快な分析を行なっているとはいえない。これは当時の時代的な制約によるところが大きい。当時の機械制大工業は、いわゆる「粗悪で廉価なもの」しかつくりえないので伝統的で芸術的な手工業の発展と

は共存が困難であるとの見方が可能であった。それゆえに伝統産業のもつ熟練の特別な意味や土地・環境の美しさが持つ独自の意味を認識した上で、工業製品の粗悪さと対比して、これらを固有価値をもつものとして強調することに大きな意味があったのである。

今日のように情報技術によって芸術作品の精巧なコピーが大量に生産されるとか、バイオ技術によって自然のなかにある種を基礎に生命体を増産するとか、高度技術によって汚染された環境を健全な形に再生するとか、といった問題を取上げるならば、固有価値を人類の知的な資産として位置付ける事は容易である。このことによってラスキンの先駆性はいささかも損われることはない。

以上、固有価値の経済理論は人類の知的な資産の無限の利用可能性（潜在性）や非代替性を基礎とし、経済発展の過程を、固有価値の継承による人間や地域の個性の形成と、その相互活用のシステムを通ずるコモン・ストックの豊富化と発展のメカニズムとして把握する。それ故に、この理論は従来の経済学の枠組みを根本的に変化させた上で従来の諸カテゴリーをしかるべき位置付けのもとで再検討しようとする。この点の詳細は別の機会に譲ろう。しかし、意外にも、この理論はコモン・ストックの理論に見られるようにスミスに代表される古典経済学の枠組みをも新しい条件のもとで再生させる。それゆえに、この経済学こそ本来の新古典派の経済学と呼ばれるべきであるのかも知れない。

Reference

- Boulding, K. E., *Evolutionary Economics*, 1981.
 Ikegami, J., *Political Economy of Information*, 1985. (in Japanese)
 ———, *Public Finance, Contemporary Fiscal Systems*, 1990. (in Japanese)
 Keynes, J. M., *The End of Laissez Faire*, 1926.
 K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Oeconomie*, 1857-78, Dietz verlag, 1953.
 Ruskin, J., *Unto This Last, Four Essays on the First Principles of Political Economy*, 1862, Everyman's Library, 1905.
 ———, *Munera Pulveris, Six Essays on the Element of Political Economy*, Pre-

face, 1871.

_____, *Fors Clavigera*, Vol. 1~8. 1871-1884.

Sen, A., *Commodities and Capabilities*, 1985.

_____, *Individual Freedom as a Social Commitment*, The New York Review, June 14 1990.

Smith, A., *Lectures on Jurisprudence*, 1723, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, 1978.

_____, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, Edited by E. Cannan, 1950.

Wiener, N., *The Human Use of Human Beings, Cybernetics and Society*, 1950-1954, Avon Books, 1967.